

新作 からくり能 友月

梅谷 陽二

上田 邦義 共作

曲柄 四番目

季節 春 桜の候

所 加賀藩 藩主邸

人物 前シテ 大野勉吉の母

後シテ 大野勉吉の亡霊（杖、薄物の被衣かすき如きを着用）

ツレ からくり人形 友月（勉吉の作、出演は人間型ロボット

〔ヒューマノイド〕、技術操作者あり）

ワキ 加賀藩藩主 前田利易公としやす

ワキツレ 家来（従者）

アイ 下役（下人）

〔前場〕

（ワキ、ワキツレ、アイ登場。）

〔次第〕

次第 ワキ 「家路を忘れし桜狩り。家路を忘れし桜狩り。

ワキツレ 夕映え匂いし花ぞ散る。

名ノリ

ワキ 詞

「これは加賀の国の藩主、前田利易にて候。本日は日柄ひがらも宜しく、和み候なごみ程に。例年にも増して見事に開花したる桜を賞あづかりて置くべく。あまたの賓客を招き候ひて。盛大なる花見の宴を催さんと存じ候。さて宴うたげの準備は、いかか候か。

アイ 「すでに準備は整ひて候。

ワキ 「からくり人形友月の備へは、いかが候ふか。本日の宴の席に、興趣を添えるべし。

アイ 「即刻呼び参らせ候。なれどそれにつき。昨日お手討ちなされし

ワキ 大野勉吉の母が。先刻よりお目通りを願ひて控へおり候。

ワキ 「いかに、勉吉の母とな。友月と共に通せ。

アイ 「畏つて候。勉吉殿の母上ならびに友月どの入られませい。

(勉吉の母に続いて友月登場。)

一セイ シテ 「花も過ぎ。かがり火消えし金沢に。わが子の春の帰れかし。

(シテ常座に立ち、ツレ笛座前に坐す)

ワキ 詞 「そなたは勉吉の母にて候や。

シテ 「さん候。

ワキ 「某に質すべきことありと心得候ぞ。

シテ 「有り難く思し巡らせ賜ふかな。されば昨日のことにて候が。

わが子勉吉へのお手討ちは、聞けばからくり友月の不逞を庇いし、ためのお手討ちとかや。あまりに無情な御仕打ちにつき。その理非を母に示させ給へや。

地謡 「からくりの因果はめぐる齒車の。咬み合いきしむ桜の種。

風の運びし種なれば。何をか恨むことやある。

主のなされし罪科は。わが子の背負いし報いぞや。

ワキ 「されば語り聞かすべし。近う寄りて聞き候へ。

本日の宴の興趣のために。昨日勉吉に命じ。からくり友月を伴ひ当屋敷に参らせ候。勉吉の意のまま友月に。当意即妙なる演技を致させ候ひしに。いずれもすぐれて面白う。見事なる趣にてまさに友月は魔術にあらうずるにて候。

シテ 「それぞいかなる罪科にて候ふや。

ワキ

「いやいや。勉吉の仕組みし一つの舞こそ余りにも面白おかしく。余は感嘆のあまり思はず友月の頭を。戯れに扇子にて一つ叩きしところ。無礼なるかな。友月はひらりと身を返して余を見据え。腰の刀を抜き放ち。余に切りかからんと致せしぞ。これまさしく不逞の振舞にて。余は従者より刀を受けて抜き放ち。まさに友月を切り捨てばやと構へし時。驚愕せる勉吉。余と友月との間に割り入りて。おのれと友月の無礼を詫びたるが。そのまま刀は勉吉を切り捨て。成敗致し候ぞ。「なんと無情なるお仕打ちにて候はずや。友月はからくりにて候。からくりの人様をあやめること。これ無き儀にて候ぞ。

シテ カカル

地謡 下歌

「申すも甲斐なきことながら。わが子の常々申しける。からくり師たる戒律を。

上歌

「世の人に。喜悅もたらすからくりの。喜悅もたらすからくりの。

（友月の舞「弁

立ち居振る舞い匠の技。人の心に迫る術。

財天への誓い」、

交わす言葉を聞き分けて。自ら律する知能あり。

位の高い舞も）

人に似せたるからくりなれど。人をあやめる心なし。

立ち居振る舞い匠の技。人の心に迫る術。

交わす言葉を聞き分けて。自ら律する知能あり。

人に似せたるからくりなれど。人をあやめる心なし。

からくり師こそ師は三世。からくり師こそすべてなり。

ちはやぶる弁財天に誓ふかな。額を打たれし友月の。

直ちに返す抜刀は。護身反射に過ぎざると。

ワキ

詞

「これはこれはいかに申し候ふべきか。友月が刀を抜きし折り。まさしく人を斬る気魄の伝はりしことよ。

シテ

「信じられませぬぞ藩主様。友月にそのような振舞いとは。それ友月よ。そなた掟を破りしか。師の戒律に背きしか。

ツレ

「弁財天に誓ひて。人様をあやめることなどおそろしや。

シテ

「さてもお尋ね申し候。何故友月を斬らず。わが子ユルメ、コメテ勉吉をお斬りなされ候ひしや。

ワキ

「その儀 からくり人形如きを成敗致すは。武士たる者の矜持きよつじに悖ると。しばし躊躇ちゆうちゆう致し候。然るにその時。あたかもわが子を庇うが如くに。転げ出たる勉吉の態ていに。いと思わず怒気どきぞ再発し。已んぬる哉成敗の刃やいばぞ勉吉に下らざるを得ず。

地謡

「無慈悲なるかな雲垂れて。

所詮からくり友月の。人さながらの振舞いに。

クセ

「世に住めば。憂うれき節ふしこもる八雲琴。乱るる絃の散る調べ。

(シテ舞うも)

思はば前髪勉吉は。母を残して長崎へ。蘭学の知を学び取り。

更なる叡智を修むべく。朝鮮・対馬たいまに木伝こでんえるが。

シテ

「季節もめぐりて渡り鳥。故郷の香りを忘れじや。

地謡

「十年ととせよ余よすぎて金沢の。母の懐に戻り来ぬ。

戻りし鳥を掻き抱き。夢とぞ思う幸せも。

哀れなるかな露草の。わが子勉吉いまや亡し。

現うつなき。有り様ありさま見るこそ。あわれなり。

息絶えたる。あたりを濡らす草の露。

友月の舞も曇りて隠れ往く。

ワキ

詞

「老母よ不憫にては候ふが。今は亡き勉吉の跡をも弔ひ。懇ろに供養致さればやと存じ候。余も勉吉の霊を弔うべし。されば亡き骸と共に自邸みづらに戻らせ候へ。以後の生業なりわいの儀。立ち行くべく計り参らせ候ぞ。
別べつ二
いかに誰かある。

アイ

「御前に候。

ワキ

「勉吉の亡き骸を伴ひて。老女をば私邸みづらに送り届け候へ。

アイ

「畏つて候。勉吉殿の母御様。まずはお立ち候へ。母御様よ。先程より

藩主様に対し色々恨み言を申し述べられ候間。お手討ちの理は別として、われわれも涙無くしては聞き能はざるところ。まこと、子に先立たれしあとに残る親の悲しみこそ、胸の張り裂けるばかりにて候ふべし。しかしながら、いかほど嘆かれましようとも詮無き事にて候はば。これも前世の縁と思し召し、いまは以て勉吉殿のお弔いを専一になさればやと存じ候。哀れなれども、勉吉ともどもお屋敷にお帰りあそばし、ゆるりと参り候へ。さても、悲しきことかな。

(アイは見送り、常座に戻る。シテ中入り)

アイ 「いかに申し候。母御様をば私邸に送り申して候。

ワキ 「一段にて候。

アイ 語り (狂言間語り) (別紙*)

〔後場〕

ワキ 詞 「さて皆々承り候へ。本日は勉吉の霊をば管絃講にて弔ふべし。その分承り候へ。して管絃の役者をこちらへ致し候へ。

アイ 「すでにこちらに控えておりますれば。すぐにも管絃講を始めさせうずるにて候。

地謡 「浄土まで。弔う法の教へには。弔う法の教へには。

子は三界の首枷ぞ。いかにこの世は幻か。

親子とても仮の宿。残されし母の苦しみは。

色即是空 空即是色。

南無釈迦牟尼佛。歸命頂來無性の生。

仏の慈悲は人のみか。生あるものに遍きて。

無性なれども からくり。如来の救いぞ笑みを分け。

「南無釈迦牟尼佛 摩訶般若波羅蜜多心経

(勉吉の亡霊登場。右手に杖。)

ワキ

ワキ

「今や何をか包むべき。口封じこそ事由なり。からくり人形友月の。無礼にかこつけ成敗す。

藩主前田利易は。勉吉の死に負うなるぞ。

その死は加賀藩存亡を。救いし貴き理なるぞよ。

この上は誠をもって弔う故。安らかに成仏し候へ。

(この間友月は、己の主人勉吉の無念を晴らさんとするが如く

刀を抜き放ち、荒々しく舞う。)

ツレ 謡

「花香る。浄土の如き加賀の地に。

友月騙り師を殺め。口を封じて理を説くか。

からくりの知は衆を救い。人の知は不条理を生ずかな。

「これ友月よ。舞い狂うてはならぬ。人をあやめてはならぬ。

現世に残りてからくりの。秘術を異国に伝うべし。

からくり人形友月の。伝説をば後世に残すべし。

(勉吉の亡霊は友月をいさめる。友月は悲しげに静かに舞う)

地謡

「魔術の如しと評判の。自律からくり友月は。

師の指図こそ統べなるが。鋭く判ずる知能あり。己の師たる勉吉の。

心の迷いに感応し。動きも律動も乱れ勝ち。

後シテ

「あらまほし。からくり人形の存在は。仏の賞でし効用は。

悲しみからの救済ぞ。

地謡

「人と楽しく舞い遊び。不思議なる技動き見せ。

老いたる者をいたわりて。淋しき衆を生気づけ。共に遊技を楽しむか。

ツレ

「住み果てぬ。おどろかしきかな現世に。

師の指図なきからくりは。役立てもなき空蟬ぞ。

地謡

「荒海に北極星を失はば。

北前船も目当て無し。航跡乱れて泊港なし。

(やがて友月は謡い終わった後、膝からくずれ落ち、両手をついて

勉吉を仰ぎ見つつ最後にうつ伏して自壊す。勉吉は自らまどつていた薄物を脱ぎ、友月の屍にかけて覆う。

いざ解脱せる勉吉は。甲いの法のりに導かれ。弘誓くわいぜいの船に囲まれつ。
生死しゅうじの海を渡りゆき。得脱とくたつの身となりける。

(別紙*)

ただいま御前様のお屋敷におきましてわれわれもそぞろ涙を催しましたが、このような悲しい目を見るのも、一つの因はからくり人形友月の魔術とも申すべき所作でございましょう。思えば、勉吉殿は幼少の頃よりまことに利発なお方で、お若い頃は長崎の地にて蘭学を学ばれ、さらには朝鮮、対馬の地にて東洋の叢知を修められて、今や医術、砲術、算術、曆学をはじめとし、学芸百般に通じる実学の大家として尊敬を集めておられる。そのお方がこの加賀の国にて日本国中にも比類なき多くの優れたからくりを次々とお作りになり、その中でもず抜けて素晴らしいからくりが友月でございます。友月は、人様と同じように足で歩き、手で操り、言葉を耳で聞き分け、物を目でしっかりと見分けます。友月の頭の働きは信じられぬほどで、しばしば勉吉殿が魔術を仕込んだのではないか、とうわさしております。

只今も母御殿が申されました如く、どんなに優れたからくりであっても、命令されたまま動くのでは面白うございませぬ。お役にも立ちますまい。やはりからくりと言えども、自ら思うように動かねば、目が見えて耳が聞こえましても、知的な能力を發揮して世の中のお役に立ち、見物のお方を楽しませることは出来ずまい。勉吉殿はこれを自律できる機能とやら申しておりましたが、この自律が出来ますためには、まず、からくりがいかなる場面に遭遇しましても自分の身の安全を保つ仕掛けが要ることでしょう。護身反射とはこのことでございましょう。ここで忘れてならないのは、からくりの世界にも戒律とか申すきびしい掟がありますよう。つまり、どんな優れたからくりであっても、「人を殺めてはならぬ」という戒律が課されているようで、先ほども友月が「弁財天に誓って人を殺めることは致しておりませぬ」と母御殿に申しておりましたが、これが戒律、国中の中から師すべてが守るべき掟でありましょう。

いやはや、世の中は戦もなく平和であります、学問文化は日々に進んでおりますよう、いまや現世の世の中に私ども人間に多少とも近い知的な能力を持った人工物のからくりが出現するようになりました。喜ぶべきことに違いはありませんが、私ども下々の者の老婆心ながら、そのような優れたからくり人形を、戦に狩り出すようなことだけは願ひ下げにして欲しいものです。いやはや、つい本心を申し上げてしまいました。よろしく、よろしくお願い申し上げます。